

無住集落を対象とした「民俗知版レッドデータブック」に関する予備的検討 Preliminary Study on the Red Data Book for Folk knowledge in an Uninhabited Village

○濱寄 文音* 林 直樹**

○Mone HAMASAKI* and Naoki HAYASHI**

1 本研究の目的

国全体の人口が減少する時代の「地域づくり」では、「限られたマンパワーで、どのように農村的な要素を継承するか」という問いが非常に重要となる。本研究の目的は、「(仮称)民俗知版レッドデータブック」(絶滅のおそれのある民俗知, 以下, 民俗知 RDB) に向けた基礎的な調査および分析を行い, 若干の考察を加えることである。なお, 本研究では, 地域資源を活用する技術, 生息している動植物に関する知識, 地域の立地に適した農法, どのように地域が保全されてきたのかといった文化的な知識など, 基本的にはその地域に暮らすことで身につく知恵やその環境における生業(の方法)を「民俗知」と呼ぶ。

民俗知 RDB では, 民俗知の送り手(主に農村)からみた民俗知絶滅の危険度, 民俗知の受け手(都市の住民など)からみた危険度が考えられるが, 今回は後者に注目した。なお, 前者に関する先駆的なものとしては, 新潟県上越市・かみえちご里山ファン倶楽部の「伝統技術レッドデータ」¹⁾をあげることができる。

2 調査対象と方法

(1) 現地調査

本研究では、「国勢調査人口ゼロ」の無住集落に注目した^(注1)。ただし, 筆者らが調査対象とした石川県小松市花立町は, 元住民が積極的に通い, 農村的な要素が色濃く残る「無住集落」である(図1)。そのような集落に注目した理由は, 次の2点である。①この先, そのような集落が増加する可能性が高い。②生活に必要な重要な民俗知が維持されている可能性が高い。



図1 小松市花立町

Fig. 1 Hanatatemachi, Komatsu

2021年, 5月~11月, 現地調査10回, 電話調査16回を実施した。主として民俗知に関する情報を収集し, 最終的に「民俗知カレンダー」という形で整理した。調査協力者は, 花立町の元住民, 大牧氏(70歳代・女性)である。

花立町は, 小松市南部に位置する山間の小集落である。代表点の標高は588m, 年最深積雪は120cmである^(注2)。冬季は, 道路が閉鎖され, 通常的手段では到達できなくなる。

(2) アンケート調査

前述の現地調査の結果をもとに, 調査票を作成し, 2021年11月, 主に金沢大学の学生(民俗知の受け手となることを想定)を対象としたアンケート調査を実施した。

* 金沢大学人間社会学域 College of Human and Social Sciences, Kanazawa University

** 金沢大学人間社会研究域 Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

民俗知, 農村計画, レッドデータブック

3 結果と考察：民俗知継承の受け手からみた絶滅の危険度

(1) 第1の危惧：作業内容に関する危惧

表1の「第1の危惧」は、項目別に「体験したことがある」かつ「(再度)体験してみたいとは思わない」の割合(%)を計算したものであり、そこでは、「草むしり・草刈り」などが上位となった。この先、民俗知RDBが作成されたとすれば、受け手からみて「作業内容が難しい」「負担が重い」ということで、それらが、「絶滅の危険度が高い」と判定される可能性がある。この場合、作業に必要な装備、作業自体の見直しが必要になると思われる。

(2) 第2の危機：アクセスに関する危惧

表1の「第2の危惧」は、項目別に、「体験したことがない」の割合(%)を求めたものであり、そこでは、「雪囲いの作業」などが上位となった。この先、民俗知RDBが作成されたとすれば、受け手からみて「体験へのアクセスが難しい」ということで、それらが、「絶滅の危険が高い」と判定される可能性がある。第1の場合と異なり、まず知ってもらうこと、体験してもらうことが重要となる。

(3) 現地での民俗知継承に関する困難

民俗知カレンダーを提示した上で月別に訪問の希望を聞いた結果、花立町に「行ってみたい」では、5月・10月などが多く、「行ってみたくない」では、4月・11月などが多かった。後者の時期の活動については、現地での民俗知継承に一定の困難が伴う可能性がある。

(謝辞) 小松市花立町の大牧氏、アンケートの回答者の皆様から多大なるご協力をいただいた。深謝の意を表します。なお、本研究はJSPS 科研費 17K07998 の助成を受けたものである。

【文献および注】 1) 中川幹太「自給に根ざした自治機能まで果たし始めた山村NPO」『若者はなぜ、農山村に向かうのか：戦後60年の再出発(現代農業増刊69号)』農山漁村文化協会、146-163、2005 (注1) 大字のポリゴンについて、人口(2015年)1人以上の区画(5次メッシュ)が一つも重なっていないものを「無住集落」とした。人口：総務省統計調査部国勢統計課、2015年・国勢調査・5次メッシュのデータ。大字のポリゴン：ゼンリンの行政区分地図データ2020。(注2) ゼンリンの行政区分地図データ2020の代表点を使用。標高：地理院地図で測定(ここではJGD2000とJGD2011は同じとみなした)。年最深積雪：メッシュ平年値2010(気象庁、平成24年作成)：国土数値情報平年値メッシュデータ。

表1 受け手からみた民俗知

Table 1 Folk knowledge from the viewpoint of receiving

項目	第1の危惧*	第2の危惧**
草むしり・草刈り	77.0	14.9
雪かき	70.3	23.0
野菜の収穫	48.6	14.9
山道歩き	47.3	35.1
昆虫採集	43.2	48.6
花の種まき・花の植え付け	41.9	36.5
野菜の栽培	41.9	29.7
落葉集め	35.1	58.1
栗拾い	32.4	51.4
自分が収穫した野菜の調理	29.7	48.6
山の知識が豊富な人との交流	17.6	67.6
熊手を使った山道の掃除	17.6	74.3
自分が採取した山菜の調理	13.5	70.3
山菜の採取	13.5	62.2
川釣り(イワナ・やまめ)	10.8	67.6
きのご類の収穫	10.8	81.1
畑の鳥獣害対策	9.5	90.5
山奥特有の花の鑑賞	8.1	79.7
きのご類の栽培	6.8	90.5
クルミ拾い	4.1	91.9
雪囲い作業	4.1	93.2

* 「体験したことがある」かつ「(再度)体験したいとは思わない(わからないを含む)」の割合(%)

** 「体験したことがない(覚えていない・わからないを含む)」の割合(%)